

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ことのほか寒かった冬が去って、今や春たけなわ。いえ、1 初夏のケハイさえうかがわれて、庭の木々は急いで夏支度^{じたぐ}を始めているようにも見えます。2 白い花をたくさん残す雪柳^{ゆきやなぎ}の上ではブナが新芽を吹き出し、金木犀^{きんもぎせ}も古い葉を落として、若葉をぐんぐんひろげています。

でも、一〇代の頃の私は、こんな季節の変化におそろしく無頓着^{むとんちゃく}でした。自分と周囲のわずかな人々にしか関心はなかった。いえ、周囲の人々が気になるのも自分との関係においてですから、ほとんど自分にしか関心がなかったと言っているでしょう。3、本の中の人々は例外でしたが。

でも、そんなときでさえ、今、思い返せば私はたくさんのおしぎに囲まれ、いつも、なぜ？、なぜ？と考えていました。わからないことだらけでした。小学生の時は、れんげの花びらがなぜ間違^{まちが}いなく美しい円をつくるのか、なぜ赤ちゃんは指に桜貝のような美しいつめを間違^{まちが}いなく生やして生まれてくるのか。①そんなことをよく考えていました。

中学生になると、なぜ自分は気が付くと、いつも友だちからはなれてひとりになっているんだろうとよく思いました。一方では、社会には、どうしてこれほどに貧富^{いふ}の差があるのか。両親も兄や姉もこんなに働くのに、なぜお盆^{ぼん}とお正月の年二回しか白いご飯が食べられないのか。そんなこともよく考えていました。経済的には貧しく育った私の中に、おカネのいらぬ国として、今は国民総幸福量(GNH)一位の国として有名になった「ブータン」という小さな小さな国の名前が入ってきたのは、六〇年以上も昔の小学校五年生か六年生の頃のことでした。そんな国で暮らしたいな、と思ったことを私は今もはつきりと憶^{おぼ}えています。

ただ、私はそんなふうにはわからないことを抱えながら、他人^{ひと}に、つまりは先生にも、周りの大人たちにも、その答えを尋ねてみることはしませんでした。すぐに本で調べてみることもしませんでした。問いのまま、あめ玉のように口の中をころがしていた、という言い方が当たっているように思います。いくつものあめ玉が出たり、引^ひっ込んだり。でも、ゆっくりなめながら考えるのは楽しいことでした。②今も、そんな人は小学校に限らず、中学校にも、高校にも、大学にもおおせいいろんならうな、と思います。問いのまま、他人に質問もせず、他の手段で急ぎ答えを求めることもなく、言ってみれば問いそのものとゆっくり、ひっそりと戯^{たわむ}れている人たちが。そして、一〇年、二〇年、ときには三〇年もたつて、思いがけないとき、思いがけないところで、答えに出会う楽しさ、嬉^{うれ}しさといったら。でも同時に、人が人と縁^{えん}あって出会ったら、黙^{だま}っていないで質問すること。それがどんなに互^{たが}いを近付け結びつけて、新しい世界への扉^{とびら}を開けてくれるかも、私はこれまでの人生で学んできました。

私たちの暮らすこの日本の社会では、どうしてか質問を遠慮^{えんりょ}する空気が強いようで、私はそれをいつも残念なことだと思ってきました。そんなふうでしたから、キンム^(ウ)先の短大の授業でも、話の途中でも質問してほしいと学生たちに頼^{たの}んできました。でも、そうしてくれる学生はなかなか出てきませんでした。終わってから、個人的に質問してくるのです。これはずい、と私はいつも思って、注意もしました。だってそれって答えを一人占^{ひとり}めしようということでしょう？ 質問するのは、確かにエネルギーのいることだけれど、でも、質問するという労をとって、その収穫^{しゅうかく}を居合わせた人々と分かち合う。それぐらい、お互いしたっていいじゃないか。そう思ってきたのです。

先ほども書いたように、質問するにはエネルギーがいります。だってすでにあるものを見つけるのではなく、ないものを見つけなくてはならないのですから。そしてそのためには、相手に関心を持つことが不可欠です。相手に関心を持つからこそ、互いの間にあるもの、見つからなかったものを接点として、そこに新しい関係が生まれたり、すでにあった関係がより深まったりするわけです。そうではありませんか。

と、ここまで来たとき、ふっと足を止めました。子どもの育ちのこと、さらには人間の「能力」について、岡本夏木氏が語っていたことを思い出したのです。岡本氏は『幼児期』（岩波新書）という本の中で「能力主義」にふれ、「ヒトリデ デキル」こと、さらには「ヒトリデ ハヤク デキルコト」という能力主義の一大スローガンを持つ危険を指摘し、「『できないこと』こそが人間を結びつける原動力」なのに、と言っているのです。その「原動力」の一角に、質問するということは、もしかすると、位置づけられるかもしれません。

全くのところ、道を尋ねることから始まって、私は質問することで、これまでどれだけ他人とつながり、新しい世界への扉を開けてもらったか、しれません。中学・高校・大学時代、私は超がつくほど無口でしたが、授業のときは質問しました。NHKの朝ドラ「花子とアン」（二〇一四年四月〜九月放映）の中で生徒だった村岡花子先生に質問するのを見ていて、ああ、私もこうだった、とよく思いました。四〇年ほど前の小さな出来事も、どうしてか、繰り返し思い出します。

三〇代に入ってもないその夜、私は東京での仕事を終えて、最終の新幹線に乗っていました。その日は仕事先で、いつになくつらいことがあって、窓際の席に座った私は、暗い窓の外に目をやって、ひとり涙をこらえていました。

と、一つおいてツウロ側の席に座った老紳士が、「いかがです」とポッキーの箱を差し出してきてくれました。「もう弁当屋もしまつて、こんなものしか買えませんでした」

私はお礼を言つて、一本いただき、何が話のきっかけだったか、それから私たちは一時間半ほど語りました。何か研究を続けてこれたらしいその方のお話は面白く、私は次々と質問し、そのひとつひとつに、その方は丁寧に答えてくださいました。やがてその方はおっしゃいました。

「若い人たちがあなたのように質問してくれたらどんなに嬉しいか。伝えておきたいことが山ほどあるのに」

そしてその方は、ドイツやアメリカでの研究生生活について、そこで発見した人の暮らしのさまざまなことについても、少しも偉ぶらず、率直に話してくださいました。私の下車駅が近付いて、私は思いついて、お名刺をいただけませんか、とお願いしました。いただいた名刺には、某国立大学工学部長の肩書きがインサツされてありました。

その後まもなく、三年ほどフリーだった私は短大に席をいただき、若い学生たちと日々向き合うことになったのですが、私はこの年月、何度この夜の楽しい会話を、そして、若い人たちの質問の少なさを嘆いたこの老紳士のことを思い出したかしれません。

今はパソコンだけでなく、スマホからでも容易にネットに接続できるので、他人にものを尋ねるなんてことはしなくてすむんじゃない？ そう考える人が多いかもしれません。でも、質問は何も答えを求めてするだけのものではないんですね。答えにはついに行き着かなくても、質問したこと

ながりが生まれる。だって私たちは全く4のもてない人に質問するのでしょうか。道を尋ねることくらいなら、するかもしれない。でもそれだって、私たちは相手を選ぶものです。そう、そのときに私たちは相手に、あなたと接点を持ちたいのですよ、と意識せずとも伝えているのではないのでしょうか。人間とは切り離されて別個に答えがあるわけではない。一見、同じに見えても、それは機器が提示する答えとは違う。人と人との問答はその人の人生や日常、その他もろもろのものが時には一瞬にしてあらわになる、とてもスリリングなものでありうるのです。

（清水真砂子『大人になるっておもしろい？』）

問一 部（ア）（オ）のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 部の「かも」と働きが同じものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア この絵はあたかも写真のようだ。

イ あそこにいるのは私の母かもしれない。

ウ 何もかもが上手いくとは限らないよ。

エ 明日は何をするかも決めておいてください。

問三 部1〜3に当てはまることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し使ってはけません。

ア まだ イ なぜなら ウ ただし エ もし オ すでに

問四 部4に当てはまる最も適切なことばを文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問五 部①「そんなこと」が指し示す内容の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

記号で答えなさい。

ア 単純明快でみんなが一度は考えたことがあるような浅はかな問い。

イ あまりに身近すぎて誰も考えようともしないような無意味な問い。

ウ 素朴だがすぐには答えを得ることができないような根本的な問い。

エ 複雑だがよく考えれば筋道は確実に見えてきそうな論理的な問い。

問六 部②「そんな人」とあるが、これはどのような「人」か、説明しなさい。

問七 — 部③「質問するという労をとって、その収穫を居合わせた人々と分かち合う」とある

が、これはどういうことか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 授業に関する内容を個人的に質問することで、自分の理解を深めた上で周囲の者に説明できるようにすること。

イ 授業中にみんなの前で疑問に思ったことを問うことで、その場にいる人全員で疑問点とその答えを共有すること。

ウ 授業の途中でも積極的に発言をすることで、なかなか自分から質問しようとしないうる雰囲気を変えようとする。

エ 授業の途中にあえて質問をすることで、話を授業の内容からそれさせてみんなの退屈をまぎらわせようとする。

問八 — 部④「『できないこと』こそが人間を結びつける原動力」とあるが、これはどういうことか、本文の内容に沿って説明しなさい。

問九 — 部⑤「何度この夜の楽しい会話を、そして、若い人たちの質問の少なさを嘆いたこの老紳士のことばを思い出したかしれません」とあるが、なぜ「私」は「この老紳士のことばを思い出した」のか、その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の問いかけが学生たちにうまく伝わらず、実のあるやり取りができないことに歯がゆさを感じているから。

イ 人に質問をすることの楽しさを老紳士が教えてくれたのに、それを誰にも伝えられないもどかしさを感じるから。

ウ 自分が教えている学生たちが質問しようとしなくて、新しいことを知る機会が失われていることを残念に思うから。

エ 学生たちの質問が低いレベルのものばかりで、学ぶことの喜びを分かち合うまでもない状況にがっかりしているから。

問十 — 部⑥「でも、質問は何も答えを求めてするだけのものではないですよ」とあるが、「質問」をすることによってどういことが得られるのか、説明しなさい。

問十一 あなたはこの文章を読んで「質問すること」についてどのように考えましたか、自分の体験をふまえて二百字以内で書きなさい。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

夏休みに入って、久蔵は毎日が愉快であった。家業の牛乳配達や瓶洗いを手伝う以外は、源治や真吉、そして近所の子供たちをつれて、北海道庁の構内や大通り公園、創成川、豊平川、円山公園などに、毎日のように遊びに出かけた。宿題はあったが、夏休みの終り頃に、かためてすればよいと久蔵は思っていた。宿題は夏休み練習帳一冊と、教育勅語を半紙に十枚墨書することであった。

久蔵は、なぜ夏休みに教師が宿題を出すのか理解できなかった。いや、夏休みだけではない、つねづね宿題を出されるたびに、久蔵はそれが不思議だった。勉強というものは学校でするものであり、家でするものとは思えなかった。教師は口癖のように「よく学び、よく遊べ」と言っていた。その学ぶ所が学校であり、学校から離れた時は遊んでよいのだと、なぜか久蔵は思いこんでいた。しかも、生徒たちといえども、小学四年以上になれば、男子も女子も家の手伝いをさせられる。親戚の家まで物を届けに行くこともあれば、家の内外の掃除や薪割りさせられることもある。特に久蔵の家は牛乳屋であった。勉強を始めていても、特別の注文があれば届けに行かねばならない。そのうえ宿題があつては、遊ぶ時間がないではないかと、久蔵は思っていた。こう思ったのは、予習復習などせずとも、級長をつとめるほどの学力が久蔵にあつたためかもしれない。

というわけで、久蔵は最初から宿題のことも忘れて、夏休みの日々をただ愉快に遊んだ。そして、いよいよ明日から第二学期が始まるという夜、宿題に気づいたがもう遅い。久蔵はいたし方なく墨を磨り、食卓の上で教育勅語を筆で書いた。一字も間違ひなく一枚書き上げるのに、一時間半を要した。久蔵はその一枚を手にとって、

(要するに、まったく宿題をしなかったわけではない)

と、安心して床についた。むろん練習帳には一字も書きこんでいない。そんなことには頓着なく久蔵はすぐに眠りこんだ。

さて、問題は翌日であった。始業式のあと、生徒たちは教室に入り、宿題を自分の机の上に置いた。教師が机間巡視をして宿題をあらためるのである。

「みんな元気だったか。まさか宿題を忘れた者はいないだろうな。忘れて来た者は、夕方まで残すことにする！」

ここで初めて、久蔵はぎくりとした。久蔵は級長である。その級長の自分が、宿題を忘れて夕刻まで残されるのは、はなはだ不名誉なことだ。級長はすべてに生徒の模範でなければならなかった。その久蔵が宿題を忘れたとあつては、教師の怒りは倍加するにちがいない。久蔵は観念した。練習帳の上に、久蔵は昨夜書いた教育勅語の写しを白い半紙と共に重ねて、教師を待った。宿題をしなかった口実を考えようと思つたが、いかなる口実も許されないような気がした。

※「教師は一人々々を批評した。『よし！』とか、『何だこの字は！』とか『まちがいだらけじゃないか！』とか言う声が、一つ一つ久蔵の胸を刺す。教師は最後に久蔵の列にまわって来た。久蔵は目をつむった。

「何だ、級長の癖に、一ページもやってこなかったとは！」

必ず雷のような叱責の音が頭上に落ちるにちがいない。覚悟した久蔵の耳に、突如、割れるような

教師の声がした。久蔵ははっと目をあげた。

「加藤！ たった五日分しかやってないとは何事だ！ この怠け者！ なぜして来なかった!? 何？ 忙しかった？ 忙しいのはみんなも同じだ。西村など、朝夕牛乳配達をしているのだぞ。暗くなるまで残つてろ！」

久蔵の胸は早鐘のように鳴った。教師は加藤の頭を二つ三つ小突いて、しだいに久蔵の席に近づいて来る。久蔵はその場から逃げ出したい思いに耐えて、しかし背筋をぴんと伸ばし、前の席の級友の頭に目を注いだ。ついに教師は、久蔵の傍に立った。久蔵は息を止めた。

「うん。よし！」

教師は上に乗っている勅語の写しを一瞥しただけで、直ちに踵を返した。練習帳を見るまでもないと思つたのであろう。久蔵は目まいを覚えた。※

その日は二学期を迎えるに当たつての訓話を聞かされただけで、授業がなかった。久蔵の号令で、生徒たちは終礼をし、廊下に出た。みんなわいわいと声を上げて出て行く中に、加藤だけが泣きながら立っている。久蔵は教室を出るにも出られなかった。自分は教育勅語を一枚書いただけで、ただの一字も練習帳の宿題をしていない。しかし加藤は、五日分はしているのである。加藤が残される以上、自分は帰つてはならぬと、久蔵は思った。

それは加藤に対する同情ではなかった。加藤は加藤のした行為に対する罰を受けている。だが自分は、受けるべき罰を受けてはいない。しかも自分の場合、二重の不正をしたように思われた。もし潔く練習帳を教育勅語の上に置いたならば、教師は必ずその一ページをひらいて見たであらう。教師を騙すつもりが自分の心のどこかにあった。教育勅語の上に置いた自分は狡猾だったと、久蔵は

① を感じた。

今からでも遅くはない。職員室に行つて、教師の前に一切を告白しようかと思つた。しかし、教師を落胆させるのも忍びない気がした。たとえ落胆させても、正直に告げ、夕刻までここに残つていれば、自分の罪は許されるのだ。詫びるべきだと久蔵は思った。だが久蔵は、職員室の前まで行き、うろろと歩いただけで、ついに職員室の中まで入ることはできなかった。この日初めて、自分③が恥ずかしい人間であることを、久蔵は肝に銘じたのである。この事件を、後年教師になつてからも、久蔵はたびたび思い出したという。

この事件があつてから、半月ほど経つてからのことであつた。初秋の日曜日の午後、久蔵は弟の源治と、友人の吉夫、実、清の五人で道を歩いていた。と、向うから近所の雑貨屋の店員が自転車をやつて来た。千吉という御用間であつた。

「おいみんな、李が欲しくないか」

千吉が愛想よく声をかけた。

「李？」

ちょうど李の熟する頃である。久蔵たちは顔を見合わせた。

「江藤さんのお屋敷にはな、李が腐るほどあるんだ。おれなんか毎日もらいに行つているんだぞ。一緒に緒にもらいに行かないか」

「へえー、誰にでもただでくれるの？ 行くか、みんな」

「うん、行く行く」

久蔵たちは千吉の自転車に乗り、駆けて行つた。江藤家は植物園のような広い庭園を持つ豪邸である。千吉は窪地の李を久蔵たちに指示して、自分は勝手口にまわつて行つた。久蔵たちは大喜びで、木に登り、枝をゆすり、李を取つた。そして懐に入れられるだけ李を入れ、千吉の出て来るのを待った。久蔵はその時、女中が咎めるように自分たちのほうを見ているような気がした。

門を出た千吉は、一人から十個ずつ李を取り上げ、籠に入れてさつさと自転車に乗つて去つて行つた。久蔵たちは大喜びで李を口にしながら歩いてしたが、不意に一人の男に声をかけられた。縞の着物を着た、一見商人ふうの男だった。

「坊ちゃんたち、おいしそうな李を食べているね」
穏やかな声であつた。

「うん、おいしいよ、この李」

久蔵が答えた。

「そう。それで、その李、どこで買つて来たの？」

男は相変らず穏やかだ。

「どこつて……」

買つて来た李ではない。といつてもらつて来た李でもない。誰にでもただでくれるから取るがよいと言つたのは千吉である。だが千吉の李でもない。その間の事情を咄嗟にはうまく説明できなかった。久蔵は答へに詰つた。とたんに男が怒鳴つた。

「こらっ！ お前ら、それをどこかで盗んで来たな」

かつて久蔵は、こんな恐ろしい声を聞いたことはなかった。学校の教師でも、こんな凄味のある声は出さない。

「ぬ、盗んだんじゃありません」

縮み上がる思いで久蔵は答えた。

「盗んだんじゃない？ じゃ、どこでもらつた」

「江藤さんのお屋敷です」

久蔵は半泣きになつて言つた。

「何？ 江藤さんのお屋敷？ それが本当なら、おれに黙いて来い」

久蔵たちは男に黙いて、今出て来た江藤家の屋敷に行つた。男の問いに屋敷の使用人たちは久蔵たちを知らないと言つた。まして、李をやるはずはないと言つた。しかし久蔵たちは盗んだつもりはない。疚しいことをしたとは思っていない。だから謝罪する気にはならない。ただ、千吉の言葉を信じて李をもらっただけなのだ。そのことを言うのだが、大人たちは頭から久蔵たちを疑つていた。千吉に聞いてくれれば、何もかもわかることだと思つた時、久蔵は不意に、自分たちから李を取り上げて、逃げるように自転車を飛ばして行つた千吉の姿を思い出した。あの愛想のいい千吉が、にわかには不気味な人間に思われた。

結局、久蔵たちは、住所氏名と親の名を聞かれた。商人ふうの男は刑事だったのである。刑事は久蔵たちの住所氏名を手帳に記すと、もとの穏やかな声に戻つて、

「今度だけは許してやる。だがもう一度こんなことをしたら、警察行きだ」と、帰って行った。

翌朝、久蔵は牛乳配達をするために、いつものように早く起きて玄関の朝刊をひらいて見た。久蔵は講談が好きで、連載物のその講談を読んでから配達に出かけるのが、常であった。その紙面をひらくと、

〈不良少年狩り！〉

という活字が目飛びこんだ。昨日の今日である。久蔵は胸騒ぎがして、その記事を読んだ。と、何とそこに自分の名が、父の名まで添えて記されてあった。久蔵はその新聞を下駄箱の蓋にかくして、配達に出た。

その日、よほど学校を休もうと思ったが、勇気を出して学校に行った。誰もが自分を胡散臭げに見ているような気がする。いつものように授業が始まった。受持の教師は何も言わなかった。何も言われないことが久蔵には恐ろしかった。教師は五時間目が終る頃、さりげなく久蔵の傍に寄り、放課後、音楽室で待っているようにとささやいた。

久蔵は音楽室で教師を待った。千吉も刑事もまったく信じられない人間に思われてならなかった。李をただでもらえと千吉は言い、今回は許してやると刑事は言った。にもかかわらず、二人は自分たち子供を裏切ったのだ。考えれば考えるほど、口惜しきで身の振れる思いであった。入って来た教師に、久蔵は泣きながら一部始終を語った。教師は肯きながら聞いていたが、

「それはひどい目にあつたな。これからは、欲しい物があつたら買ってもらふことだ。もう泣くな」と言つて帰してくれた。一言も咎めぬ教師の態度に、久蔵は言ひようもない慰めを感じた。だが、

もう一つの難関が待っている。父や母の叱責である。父はこの辺りでは有名な人間だった。札幌六区の祭典委員長を父はつとめていた。六区にはデパート五番館もあれば、大きな商店もある。建設会社もある。広い屋敷を持つ江藤家もある。祭典委員長は、近辺きつての高額所得者か、名士になるのが常であつた。だが六区に限って、何の財産も地位もない一介の牛乳店主である久蔵の父が委員長であつた。その父の名誉を、久蔵は汚したことになる。久蔵は恐る恐るわが家に帰った。が、父も母も、久蔵を一切咎めなかった。新聞が下駄箱の蓋から見つかった証拠に、机の上に置かれてあつたが、そのことについても咎めはなかった。ただ仲夫はいつもの穏やかな語調で言った。

「お父さんは、久蔵を信じているよ。久蔵は陰でこそそと悪いことのできる人間ではない。悪いことをしたら、必ず正直に謝る人間だ」

この言葉を聞いたとたん、久蔵は不意に、夏休みの宿題を怠けた時のことを思い出した。教師は、級長の久蔵が宿題を忘れるはずがないと、頭から信用して調べもしなかった。にもかかわらず正直に謝ることをしなかった。あの日残されるべきは、あの加藤ではなく、この自分であるはずだった。教師に叱責されるのは、あの加藤ではなく、この自分自身であるべきはずだった。父仲夫は、その時のことを知ってか知らずか、久蔵を、悪いことをしたならば必ず謝る人間だと言つた。

久蔵は顔を上げることができなかった。そして、誰かが、人間のするすべてのことを、じつと見通しているような恐れを感じた。久蔵のすることを、何もかもわかつている者があるのを感じた。それを伸と呼ぶべきか、仏と呼ぶべきか、むしろ少年久蔵にはわからなかったが、久蔵は身の引きしまる

のを感じた。盗みもしないのに不良少年として新聞に名前を出されたのは、宿題を怠けても罰せられなかった代りの罰である、久蔵は思った。それ以来、久蔵は以前よりも熱心に勉強するようになった。

(三浦綾子『愛の鬼才』)

(注) 1 教育勅語……明治天皇の名で国民道德の根源、国民教育の基本理念を示したことば。

2 机間巡視……教室の机の間を教師が歩いて、生徒の様子を見て回ること。

3 一瞥……ちらと見ること。

4 踵を返す……引き返す。

5 狡猾……ずるがしこいこと。

6 御用聞……得意先の用事・注文などを聞いて回る人。

問一 ……部(a)「頓着なく」・(b)「あらためる」・(c)「にわかに」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

(a)「頓着なく」

ア 気づかないで イ あじけなくて ウ かまわないで エ いたたまれなくて

(b)「あらためる」

ア 反省する イ 集める ウ 調べる エ 直す

(c)「にわかに」

ア しょっちゅう イ たまに ウ 急に エ 何となく

問二 ……部1・2にはどんなことばが入るか、最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

部1

ア 自業自得 イ 自己嫌悪 ウ 弱肉強食 エ 絶体絶命

部2

ア 久蔵の手をわずらわせた イ 久蔵は胸をなで下ろした

ウ 久蔵の顔から血が引いた エ 久蔵は耳が痛くなった

問三 ……部①「いかなる口実も許されないような気がした」とあるが、これはなぜか、説明しなさい。

問四「――部（※から※まで）における「久蔵」の心情の移り変わりを示したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア（恐怖） ↓ （屈辱） ↓ （あきらめ・放心）
イ（恐怖） ↓ （緊張） ↓ （あきらめ・安心）
ウ（緊張） ↓ （恐怖） ↓ （拍子抜け・混乱）
エ（期待） ↓ （不安） ↓ （拍子抜け・絶望）

問五「――部②「受けるべき罰」とあるが、これはどのようなことに対する「罰」か、答えなさい。

問六「――部③「自分が恥ずかしい人間である」とあるが、ということが「恥ずかしい」のか、説明しなさい。

問七「――部④「久蔵は言いようもない慰めを感じた」とあるが、これはなぜか、その理由の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 級長である自分が、千吉にだまされたことを刑事にうまく伝えられず、誇りを傷つけられたが、教師は自分の話をすぐに信用してくれ、かわりに弁解してくれたから。
イ 千吉にだまされたことはともかく、刑事に裏切られたことがショックだったが、教師はこの事件に対して興味を示さず、簡単な状況説明だけで許してくれたから。
ウ 千吉のアドバイスがあったにもかかわらず刑事に発見され、新聞記事にされてしまい落ち込んでいたが、教師は自分の話を真剣に聞いてくれ、許してくれたから。
エ 千吉や刑事に裏切られてしまったことで、大人に対して不信感を感じていたが、教師は自分の話をすぐに信用してくれ、叱責したりせずに受け入れてくれたから。

問八「――部⑤「久蔵は顔を上げることができなかった」とあるが、このときの「久蔵」の心情の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のせいで父に恥をかかせてしまったので、申しわけなく思っている。
イ 正直に謝ることができなかったことを思い出し、恥ずかしく思っている。
ウ 父が自分の話を全く聞かずに慰めてきたことに対し、腹立たしく思っている。
エ 父が手放しに自分のことを信用してくれたことに対し、うしろめたく思っている。

問九「――部⑥「それ以来、久蔵は以前よりも熱心に勉強するようになった」とあるが、これはなぜか、説明しなさい。

問十「久蔵」は、「宿題の件」と「李の件」を、最終的にはどのようにとらえているか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

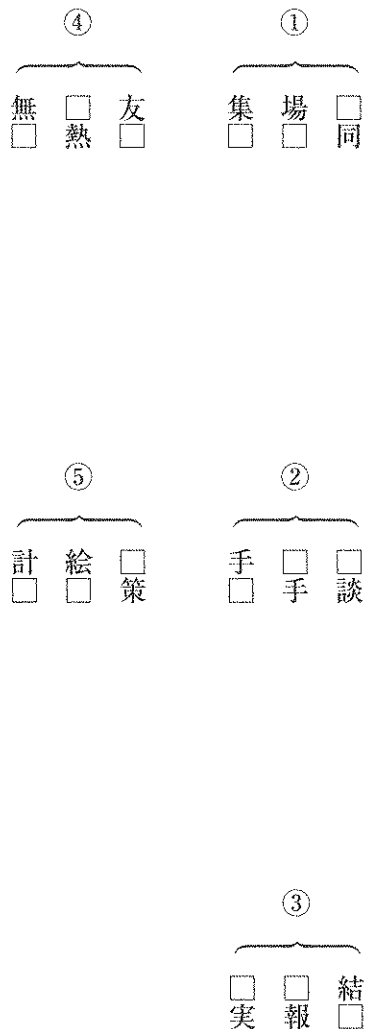
- ア 「李の件」で受けた不当な扱いは、「宿題の件」で受けるべき罰を受けなかった報いとして受けとめている。
イ 「宿題の件」は苦い思い出として、「李の件」は不思議な体験としてとらえて、ときどき懐かしく思い出している。
ウ 「宿題の件」は恥ずべき思い出として、「李の件」は忘れたい過去としてとらえて、思い出さないようにしている。

エ 「李の件」も「宿題の件」も、捨てる神あれば拾う神ありという格言を実感した体験としてとらえて、大事にしている。

問十一「久蔵」の人物像の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 根は正直で真面目だが、大人の威圧的な態度に立ち向かうほどの勇氣はなく、判断を人まかせにしてしまう無責任な人物。
イ 正直に罪を告白できないような氣弱なところもあるが、自分の悪いところを素直に認め、教師や親への感謝も忘れない実直な人物。
ウ いざとなれば自分の正当性を訴え、自分の利益を追求してしまうわがままな面もあるが、友だちに申し訳なく感じる優しさもある人物。
エ 級長をやるなど、他人から信頼される優秀な面もあるが、人の言うことを全く聞き入れようとせず、あとで苦勞をするような頑固な人物。

③ 次の①～⑤のグループにおいて、□に共通して当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。



④ 同じ内容のことわざを二つずつ組み合わせたものの中で、一つだけ意味の一致しないものがあります。その組み合わせはどれか、記号で答えなさい。

- ① ア (喉元過ぎれば熱さを忘れる・羹に懲りて膾を吹く)
イ (猫に小判・馬の耳に念仏)
ウ (弘法も筆の誤り・猿も木から落ちる)
エ (月とすっぽん・提灯に釣り鐘)
- ② ア (割れ鍋にとじ蓋・蓼食う虫も好き好き)
イ (あぶはち取らず・二兎を追う者は一兎をも得ず)
ウ (塵も積もれば山となる・人の噂も七十五日)
エ (豆腐にかすがい・ぬかにくぎ)
- ③ ア (百聞は一見にしかず・論より証拠)
イ (好きこそものの上手なれ・下手の横好き)
ウ (蛙の子は蛙・瓜のつるになすびはならぬ)
エ (出る杭は打たれる・雉も鳴かすば打たれまい)

⑤ 次の会話文中の() 部①～③に入ることばとして最も適切なものをそれぞれ後から選び、記号で答えなさい。

「だれか、牛乳を買いに行ってくれない？」
「はい、私(①)行くわ。」
「ぼく(②)行くよ。」
「おれ(③)行かないよ。」

- ① アも イが ウに エの
② アの イに ウは エも
③ アは イも ウが エの

⑥ 次の() 部①・②に入ることばの組み合わせとして適切でないものを後から一つ選び、記号で答えなさい。

- 「僕(①)お茶のほう(②)いいよ。」
ア ①も ②が イ ①は ②が
ウ ①が ②は エ ①も ②は

「句読点」や「かぎカッコ」なども、一字として数えます。

一	問一	ア	イ	ウ	エ	オ				
二	問二	問三			1	2	3	問四	問五	問七
三	問三									
四	問四									
五	問五									
六	問六									
七	問七									
八	問八									
九	問九									
十	問十									
十一	問十一									
十二	問十二									
十三	問十三									
十四	問十四									
十五	問十五									
十六	問十六									
十七	問十七									
十八	問十八									
十九	問十九									
二十	問二十									
二十一	問二十一									
二十二	問二十二									
二十三	問二十三									
二十四	問二十四									
二十五	問二十五									
二十六	問二十六									
二十七	問二十七									
二十八	問二十八									
二十九	問二十九									
三十	問三十									
三十一	問三十一									
三十二	問三十二									
三十三	問三十三									
三十四	問三十四									
三十五	問三十五									
三十六	問三十六									
三十七	問三十七									
三十八	問三十八									
三十九	問三十九									
四十	問四十									
四十一	問四十一									
四十二	問四十二									
四十三	問四十三									
四十四	問四十四									
四十五	問四十五									
四十六	問四十六									
四十七	問四十七									
四十八	問四十八									
四十九	問四十九									
五十	問五十									
五十一	問五十一									
五十二	問五十二									
五十三	問五十三									
五十四	問五十四									
五十五	問五十五									
五十六	問五十六									
五十七	問五十七									
五十八	問五十八									
五十九	問五十九									
六十	問六十									
六十一	問六十一									
六十二	問六十二									
六十三	問六十三									
六十四	問六十四									
六十五	問六十五									
六十六	問六十六									
六十七	問六十七									
六十八	問六十八									
六十九	問六十九									
七十	問七十									
七十一	問七十一									
七十二	問七十二									
七十三	問七十三									
七十四	問七十四									
七十五	問七十五									
七十六	問七十六									
七十七	問七十七									
七十八	問七十八									
七十九	問七十九									
八十	問八十									
八十一	問八十一									
八十二	問八十二									
八十三	問八十三									
八十四	問八十四									
八十五	問八十五									
八十六	問八十六									
八十七	問八十七									
八十八	問八十八									
八十九	問八十九									
九十	問九十									
九十一	問九十一									
九十二	問九十二									
九十三	問九十三									
九十四	問九十四									
九十五	問九十五									
九十六	問九十六									
九十七	問九十七									
九十八	問九十八									
九十九	問九十九									
一百	問一百									
一百一	問一百一									
一百二	問一百二									
一百三	問一百三									
一百四	問一百四									
一百五	問一百五									
一百六	問一百六									
一百七	問一百七									
一百八	問一百八									
一百九	問一百九									
二百	問二百									
二百一	問二百一									
二百二	問二百二									
二百三	問二百三									
二百四	問二百四									
二百五	問二百五									
二百六	問二百六									
二百七	問二百七									
二百八	問二百八									
二百九	問二百九									
三百	問三百									
三百一	問三百一									
三百二	問三百二									
三百三	問三百三									
三百四	問三百四									
三百五	問三百五									
三百六	問三百六									
三百七	問三百七									
三百八	問三百八									
三百九	問三百九									
四百	問四百									
四百一	問四百一									
四百二	問四百二									
四百三	問四百三									
四百四	問四百四									
四百五	問四百五									
四百六	問四百六									
四百七	問四百七									
四百八	問四百八									
四百九	問四百九									
五百	問五百									
五百一	問五百一									
五百二	問五百二									
五百三	問五百三									
五百四	問五百四									
五百五	問五百五									
五百六	問五百六									
五百七	問五百七									
五百八	問五百八									
五百九	問五百九									
六百	問六百									
六百一	問六百一									
六百二	問六百二									
六百三	問六百三									
六百四	問六百四									
六百五	問六百五									
六百六	問六百六									
六百七	問六百七									
六百八	問六百八									
六百九	問六百九									
七百	問七百									
七百一	問七百一									
七百二	問七百二									
七百三	問七百三									
七百四	問七百四									
七百五	問七百五									
七百六	問七百六									
七百七	問七百七									
七百八	問七百八									
七百九	問七百九									
八百	問八百									
八百一	問八百一									
八百二	問八百二									
八百三	問八百三									
八百四	問八百四									
八百五	問八百五									
八百六	問八百六									
八百七	問八百七									
八百八	問八百八									
八百九	問八百九									
九百	問九百									
九百一	問九百一									
九百二	問九百二									
九百三	問九百三									
九百四	問九百四									
九百五	問九百五									
九百六	問九百六									
九百七	問九百七									
九百八	問九百八									
九百九	問九百九									
一千	問一千									
一千一	問一千一									
一千二	問一千二									
一千三	問一千三									
一千四	問一千四									
一千五	問一千五									
一千六	問一千六									
一千七	問一千七									
一千八	問一千八									
一千九	問一千九									
二千	問二千									
二千一	問二千一									
二千二	問二千二									
二千三	問二千三									
二千四	問二千四									
二千五	問二千五									
二千六	問二千六									
二千七	問二千七									
二千八	問二千八									
二千九	問二千九									
三千	問三千									
三千一	問三千一									
三千二	問三千二									
三千三	問三千三									
三千四	問三千四									
三千五	問三千五									
三千六	問三千六									
三千七	問三千七									
三千八	問三千八									
三千九	問三千九									
四千	問四千									
四千一	問四千一									
四千二	問四千二									
四千三	問四千三									
四千四	問四千四									
四千五	問四千五									
四千六	問四千六									
四千七	問四千七									
四千八	問四千八									
四千九	問四千九									
五千	問五千									
五千一	問五千一									
五千二	問五千二									
五千三	問五千三									
五千四	問五千四									
五千五	問五千五									
五千六	問五千六									
五千七	問五千七									
五千八	問五千八									
五千九	問五千九									
六千	問六千									
六千一	問六千一									
六千二	問六千二									
六千三	問六千三									
六千四	問六千四									
六千五	問六千五									
六千六	問六千六									
六千七	問六千七									
六千八	問六千八									
六千九	問六千九									
七千	問七千									
七千一	問七千一									
七千二	問七千二									
七千三	問七千三									
七千四	問七千四									
七千五	問七千五									
七千六	問七千六									
七千七	問七千七									
七千八	問七千八									
七千九	問七千九									
八千	問八千									
八千一	問八千一									
八千二	問八千二									
八千三	問八千三									
八千四	問八千四									
八千五	問八千五									
八千六	問八千六									
八千七	問八千七									
八千八	問八千八									
八千九	問八千九									
九千	問九千									
九千一	問九千一									
九千二	問九千二									
九千三	問九千三									
九千四	問九千四									
九千五	問九千五									
九千六	問九千六									
九千七	問九千七									
九千八	問九千八									
九千九	問九千九									
一万	問一万									
一万一	問一万一									
一万二	問一万二									
一万三	問一万三									
一万四	問一万四									
一万五	問一万五									
一万六	問一万六									
一万七	問一万七									
一万八	問一万八									
一万九	問一万九									
二万	問二万									
二万一	問二万一									
二万二	問二万二									
二万三	問二万三									
二万四	問二万四									
二万五	問二万五									
二万六	問二万六									
二万七	問二万七									
二万八	問二万八									
二万九	問二万九									
三万	問三万									
三万一	問三万一									
三万二	問三万二									
三万三	問三万三									
三万四	問三万四									
三万五	問三万五									
三万六	問三万六									
三万七	問三万七									
三万八	問三万八									
三万九	問三万九									
四万	問四万									
四万一	問四万一									
四万二	問四万二									
四万三	問四万三									
四万四	問四万四									
四万五	問四万五									
四万六	問四万六									
四万七	問四万七									
四万八	問四万八									
四万九	問四万九									
五万	問五万									
五万一	問五万一									
五万二	問五万二									
五万三	問五万三									
五万四	問五万四									
五万五	問五万五									
五万六	問五万六									
五万七	問五万七									
五万八	問五万八									
五万九	問五万九									
六万	問六万									
六万一	問六万一									
六万二	問六万二									
六万三	問六万三									
六万四	問六万四									
六万五	問六万五									
六万六	問六万六									
六万七	問六万七									
六万八	問六万八									
六万九	問六万九									
七万	問七万									
七万一	問七万一									
七万二	問七万二									
七万三	問七万三									
七万四	問七万四									
七万五	問七万五									
七万六	問七万六									
七万七	問七万七									
七万八	問七万八									
七万九	問七万九									
八万	問八万									
八万一	問八万一									
八万二	問八万二									
八万三	問八万三									
八万四	問八万四									
八万五	問八万五									
八万六	問八万六									
八万七	問八万七									
八万八	問八万八									
八万九	問八万九									
九万	問九万									
九万一	問九万一									
九万二	問九万二									
九万三	問九万三									
九万四	問九万四									
九万五	問九万五									
九万六	問九万六									
九万七	問九万七									
九万八	問九万八									
九万九	問九万九									
十万	問十万									
十万一	問十万一									
十万二	問十万二									
十万三	問十万三									
十万四	問十万四									
十万五	問十万五									
十万六	問十万六									
十万七	問十万七									
十万八	問十万八									
十万九	問十万九									
十一万	問十一万									
十一万一	問十一万一									
十一万二	問十一万二									
十一万三	問十一万三									
十一万四	問十一万四									
十一万五	問十一万五									
十一万六	問十一万六									
十一万七	問十一万七									
十一万八	問十一万八									
十一万九	問十一万九									
十二万	問十二万									
十二万一	問十二万一									
十二万二	問十二万二									
十二万三	問十二万三									
十二万四	問十二万四									
十二万五	問十二万五									
十二万六	問十二万六									
十二万七	問十二万七									
十二万八	問十二万八									
十二万九	問十二万九									
十三万	問十三万									
十三万一	問十三万一									
十三万二	問十三万二									
十三万三	問十三万三									
十三万四	問十三万四									
十三万五	問十三万五									
十三万六	問十三万六									
十三万七	問十三万七									
十三万八	問十三万八									
十三万九	問十三万九									
十四万	問十四万									
十四万一	問十四万一									
十四万二	問十四万二									
十四万三	問十四万三									
十四万四	問十四万四									
十四万五	問十四万五									
十四万六	問十四万六									
十四万七	問十四万七									
十四万八	問十四万八									
十四万九	問十四万九									
十五万	問十五万									
十五万一	問十五万一									
十五万二	問十五万二									
十五万三	問十五万三									
十五万四	問十五万四									
十五万五	問十五万五									
十五万六	問十五万六									
十五万七	問十五万七									
十五万八	問十五万八									
十五万九	問十五万九									
十六万	問十六万									
十六万一	問十六万一									
十六万二	問十六万二									
十六万三	問十六万三									
十六万四	問十六万四									
十六万五	問十六万五									
十六万六	問十六万六									
十六万七	問十六万七									
十六万八	問十六万八									
十六万九	問十六万九									
十七万	問十七万									
十七万一	問十七万一									
十七万二	問十七万二									
十七万三	問十七万三									
十七万四	問十七万四									
十七万五	問十七万五									
十七万六	問十七万六									
十七万七	問十七万七									
十七万八	問十七万八									
十七万九	問十七万九									
十八万	問十八万									
十八万一	問十八万一									
十八万二	問十八万二									
十八万三	問十八万三									
十八万四	問十八万四									
十八万五	問十八万五									
十八万六	問十八万六									
十八万七	問十八万七									
十八万八	問十八万八									
十八万九	問十八万九									
十九万	問十九万									